

3. 油症児の歯科学的検討

昭和47年に油症児は健康児に比べ歯牙の形成が遅れる傾向にあることを窺わせる所見がみられたが、その後の状態を比較検討するため玉之浦地区の児童生徒についてパントモグラフィーX線像所見をもとに歯牙形成状態を観察したが、油症児・未認定児・健康児間の歯牙形成度は有意と思われる差は認められなかった。

4. 油症児の視機能と前眼部症状について

油症の主要症状として前眼部症状が重視されてきたが、発育成長期におけるこれらの症状が小児の視機能にいかに関与するか、玉之浦地区の児童・生徒を対象に前眼部症状と視機能について比較検討した。

- 1) 結膜色素沈着・マイボーム腺肥大は健康児でも少なからずみられるが、小学高学年・中学校では油症児に色素沈着が高率にみられた。
- 2) 屈折異常は油症児が健康者より若干多いが、屈折分布はほぼ同一で差は見られなかった。
- 3) 色素沈着・マイボーム膜肥大の前眼部症状と視機能の間には直接の関連は見られなかった。
- 4) 睫毛内反以外の原因による角膜上皮欠損は、患者・未認定者にやや多かったが検討する必要がある。

以上4項目の調査を総括すると油症児は危懼されたほど非汚染健康児に比して、精神的・身体的に有意な差は見られなかったが、さらに今後とも追跡観察する必要がある。

5. PCBの母体及び胎児への影響について

油症患者の体内に蓄積されているPCBが次世代に及ぼす影響が憂慮されている。そこで油症患者とPCB汚染を受けていない一般健康者の母乳・血液・胎盤・臍帯血・羊膜のPCB濃度を測定し、母親から胎児・乳児へのPCB移行状態を調査した。

- 1) 母乳中PCB濃度は油症患者・健康者いずれも経時的な変化はみられない。
- 2) 油症患者の血液・母乳中PCBの性状は一般健康者とは異なっていた。
- 3) 産婦の血中PCBは母乳に比べ低い濃度であった。
- 4) 臍帯血中PCB濃度は、血液及び母乳に比べて低く、又、胎盤・羊膜よりも低かった。

今後は血液及び胎盤の脂肪中PCBを検討するとともに、経胎盤油症児発生の機序について研究したい。

1. カネミ油被害地区における児童生徒の精神衛生学的検討

長崎大学小児科学教室

松下 端夫 遠矢 芳一

井上千代子 辻 芳郎

長崎市立乳児院

木寺 淑

PCB混入油中毒事件発生以来10年を経過し、児童生徒における身体的影響は現在殆んどみら

れなくなっている。しかし、大量の被害者をだした玉の浦地区においては、身体的問題のみならず社会的問題、精神的苦痛は、計り知れないものがある。今回は、同地区の児童生徒の精神衛生上の問題について、欲求不満テスト、性格テストを用いて検討を行なった。

対 象

玉の浦地区の保育園児 28 名（被害者及び同家族 5 名を含む）、小学生 129 名（45 名）、中学生 88 名（59 名）で総計 245 名（109 名）を対象とした。

方 法

日常生活において欲求不満を起す時の対処のしかたを測定することによって人格構造を理解する試みである P-F スタディ（絵画-欲求不満テスト）を使用した。これにより、全国標準値と玉の浦地区の平均値、標準偏差値を比較し、更に、被害者（家族を含む）の値と比較した。又、中学生には性格を 5 種類に分類して全体を分析する Y-G テスト（矢田部-ギルホード性格検査）も併せ行ない平均値にて比較した。

結 果

I : P-F スタディ

- ① GCR (Group Conformity Rating)(図 1) 集団一致度を示すもので、欲求不満を来した時に年齢相応の平均的反応ができるかどうかをみるものであり、これにより社会適応性がどうかということを吟味できる。
- ② プロフィール(図 2) 欲求不満に対してどんな方向、どんな型に反応するかをみるもので、次のように分ける。

方 向 : ① 外罰方向 Extrapunitiveness (E)

② 内罰方向 Intropunitiveness (I)

③ 無罰方向 Impunitiveness (M)

型 : ① 障害優位型 Obstacle - Dominance (O-D)

② 自己防禦型 Ego - Defence (E-D)

③ 欲求固執型 Need - Persistence (N-P)

これらの 3 つの組合せにより、評価するものである。

- A) 園児では E が標準に比べ低く、M、N-P が高い傾向を示し、社会に適応するために必要な適度の攻撃性に欠け、問題解決の意志は高いが気が弱くて言い訳や、自己弁護をはかる傾向が強い。被害者群ではこの傾向はあまり強くなかった。
- B) 小学低学年では、1, 2, 3 年生とも E が低く、M が高い傾向がある。即ち、問題解決の意志が低く、不満があっても解決をさけて気持ちを抑圧する傾向が強い。被害者群も同様な傾向がさらに強くみられている。
- C) 小学高学年になると、4 年生までは低学年と同様な傾向であるが、5, 6 年生では標準と変わらない範囲となり、被害者群では 5 年生まで低学年と同じ傾向であり、6 年生になると標準と同等である。
- D) 中学生では標準と同等であり、被害者群もまた同じであった。

P-F スタディの結果をまとめてみると

- ① 全体として GCR が低く、特に高学年で顕著であったが、被害者群に強いわけではなかった。

② プロフィールでは低学年でみられた低いEと高いMという傾向では学年が進むにつれて標準と同じになり、正常の発達をしていることを示唆している。被害者群も母集団と変わらない傾向であった。

II: Y-Gテスト

① プロフィールを5典型に分類した。(表1)

各類型の割合は、被害者群、非被害者群とも殆んど差はみられなかった。

② 平均点によるプロフィール(表2)

男子に比し、女子が全体にやや右寄り、情緒不安定積極的な傾向を示しているが、男女ともに被害者群と非被害者群の間に差は認められなかった。

考案 結語

玉の浦地区の児童生徒全体として社会適応性が低く、低学年では適度な攻撃性に欠けていたものが学年が進むにつれて正常の発達をしているが、油症及び被害者、或は被害者家族について特に強い傾向ではなかった。そのことが地域特異性なのかは今後経過をみる必要がある。

図1

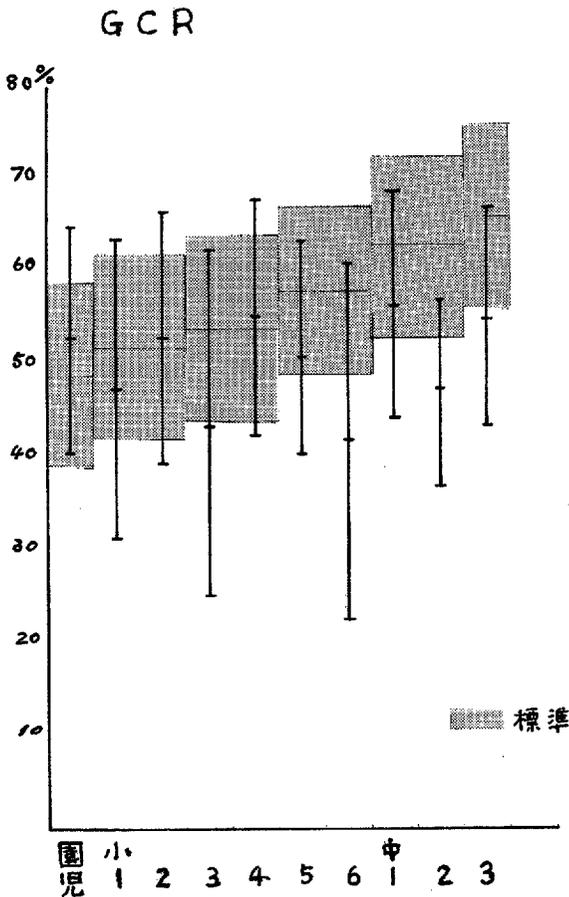


図 2

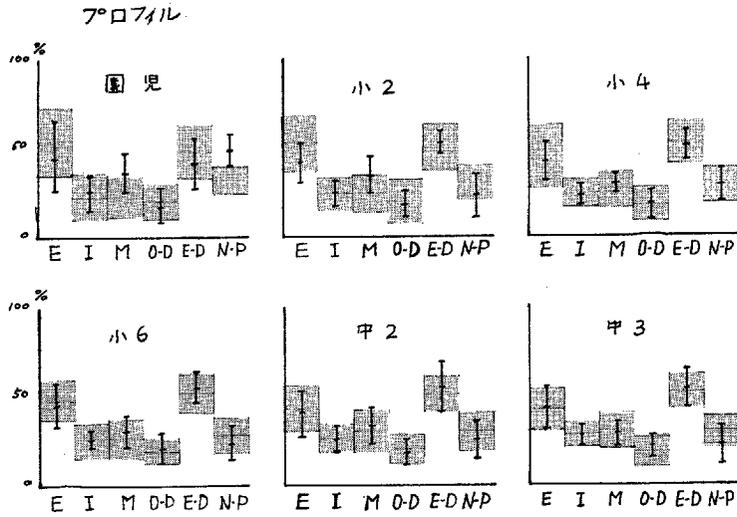


表 1 Y-G検査プロフィールの五典型

典型	英語名	形による名称	因 子		
			情緒安定性 DCIN	社会適応性 OCo Ag	向 性 GRTAS
A 型	Average Type	平均型	平均	平均	平均
B 型	Black List T	右寄り型	不安定	不適応	外向
C 型	Calm T	左寄り型	安定	適応	内向
D 型	Director T	右下がり型	安定	適応又は平均	外向
E 型	Eccentric T	左下がり型	不安定	不適応又は平均	内向

非被害者 32名	A 23%	B 30%	C 13%	D 13%	E 21%
被害者 65名	A 22%	B 30%	C 16%	D 11%	E 20%

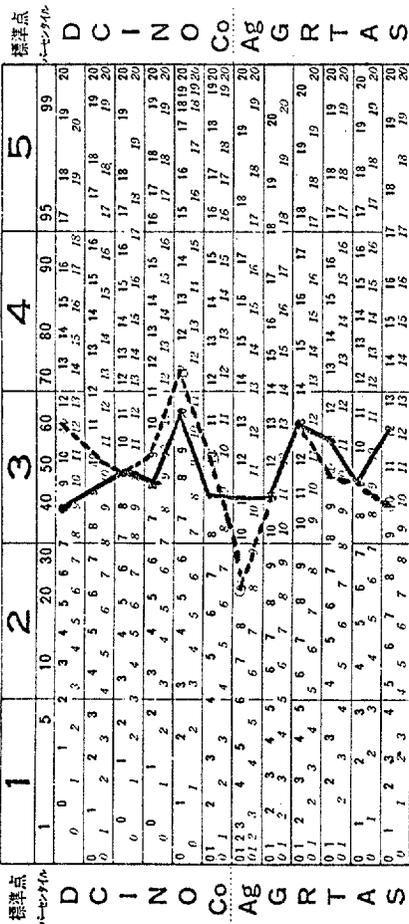
表 2 Y-G性格検査得点の平均値

群 別		人数	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
男	油症被害児群	32	8.1	8.8	9.0	8.3	9.9	8.5	11.2	11.3	12.9	11.0	9.3	12.2
	非被害児群	19	10.7	10.0	9.4	8.8	11.1	9.7	9.3	10.7	13.4	9.8	8.6	10.3
女	油症被害児群	33	12.0	12.5	13.2	11.4	11.3	10.6	11.2	11.3	12.6	9.7	8.5	10.4
	非被害児群	13	12.1	12.5	11.0	11.1	12.5	9.8	12.7	11.7	12.8	8.0	11.3	12.7

男子 被害者群

非被害者群

矢田部ギルフォード性格検査プロフィール



抑うつ性小
気分の変化小
劣等感小
神経質でない
客観的
協調的
攻撃的でない
非活動的
非衝動的
内省的でない
非主導的

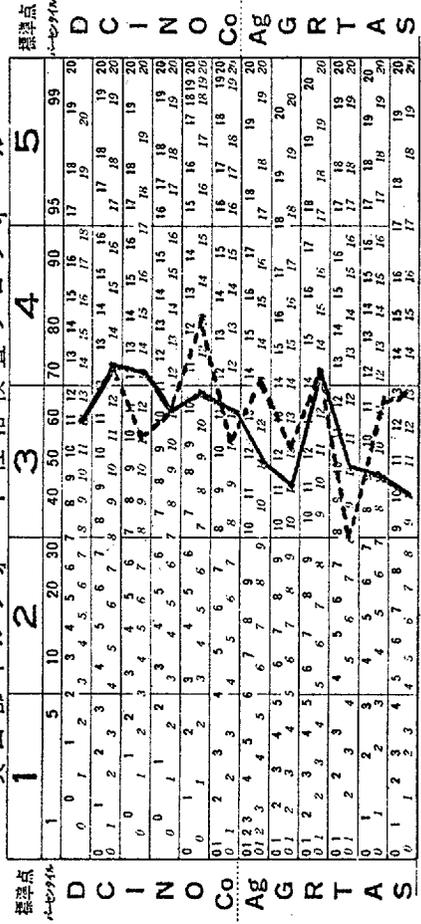
抑うつ性大
気分の変化大
劣等感大
神経質
主観的
非協調的
攻撃的
活動的
内省的でない
思考的外向
支配性大
社会的外向

情緒的安定
社会的適応
非活動的
非衝動的
内省的
非主導的

女子 被害者群

非被害者群

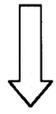
矢田部ギルフォード性格検査プロフィール



抑うつ性小
気分の変化小
劣等感小
神経質でない
客観的
協調的
攻撃的でない
非活動的
非衝動的
内省的でない
思考的外向
支配性大
社会的外向

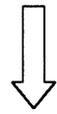
抑うつ性大
気分の変化大
劣等感大
神経質
主観的
非協調的
攻撃的
活動的
内省的でない
思考的外向
支配性大
社会的外向

情緒的安定
社会的適応
非活動的
非衝動的
内省的
非主導的



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



PCB 混入油中毒事件発生以来 10 年を経過し、児童生徒における身体的影響は現在殆どみられなくなっている。しかし、大量の被害者をだした玉の浦地区においては、身体的問題のみならず社会的問題、精神的苦痛は、計り知れないものがある。今回は、同地区の児童生徒の精神衛生上の問題について、欲求不満テスト、性格テストを用いて検討を行った。